

東北大学大学院情報科学研究科
言語変化・変異研究ユニット主催

講演会のご案内

講師

浅川 照夫 先生

(東北大学高度教養教育・学生支援機構 教授)

日時： 3月10日(火) 15時 ~ 17時
場所： 情報科学研究科棟 2階 中講義室
題目： 「構文の発生、定着そして廃退」

キーワード： 英語の変化・変異、文法化、前置詞、out、of、Tough 構文

概要：

Hopper-Traugott (1993, 日野訳) によると、文法化 (grammaticalization) 研究には (i) 「文法的な形式の源をさぐり、文法変化における典型的なみちすじ (pathways) を追究する」通時的研究と、(ii) 「文法化を主として統語的、談話語用論的現象 (discourse pragmatic phenomena) としてとらえ、言語使用を流動的パターンとして研究する」共時的研究の二つの観点がある。共時態と通時態を截然と区別する立場からは、両者の融合すなわち汎時的研究を望むことはできないが、文法化現象に限らず、文法の共時的側面に通時的側面が部分的に反映されていることは間違いない。たとえば、Reanalysis による周辺の副詞表現 (anything like, sort of, as if 等)、Deverbal Prepositions にみられる prototypicality の差 (facing<failing<notwithstanding<during<past) などは範疇内部の不均質性を表すと同時に歴史変化の動的プロセスとも合致している。言語は死語でない限り常に変化する。したがって、共時態研究としての言語理論に、言語の可変性というプログラムを何らかの形で組み入れることは決して的外れな試みとは言えないだろう。

本発表では、(1) 副詞から前置詞への文法化現象としての out-NP (ex. *John looked out the window*)、(2) TOUGH 構文と ADJ-of 構文の混交構文 (ex. *The goal is difficult of attainment*) のふたつの現象に照準を合わせる。(1) は 19 世紀半ばからアメリカ英語に出現し、前置詞目的語の厳しい選択制限をどこまで緩めることができるのか、関心がもたれる。(2) は 15 世紀前後に出現したと推定されるが、20 世紀半ばから急速に衰退し始め、現在では一部の表現に限られてきている。これらの事例から、現代英語でも進行しつつある構文の発生 (Emergence) と定着 (Entrenchment) および廃退 (Estrangement) という言語変化を理論的にどのように捉えていけるか考えてみたい。

~~~~~

多数の方のご来聴を歓迎いたします (申し込み・参加費不要)

本講演会は、東北大学運営費交付金、科学研究費・基盤研究 (C) 「史的コーパスを活用した日英語の動詞と形容詞の文法化についての統語論的研究」による補助を受けています。

問い合わせ先： 小川芳樹 (ogawa@ling.human.is.tohoku.ac.jp)

言語変化・変異研究ユニット URL:

<http://ling.human.is.tohoku.ac.jp/change/home.html>